

# こころの便り

第218号

平成30年5月

〒679-1434  
兵庫県たつの市新宮町大屋六六ハ一十二  
株式会社新宮運送グループ  
代表/木南 一志  
kininami@shingu.co.jp  
電話079-1175-1212

## まさかはない

あつという間に山は緑に覆われて、今年も草との格闘が始まります。冬の寒い時に春の草が少しずつ芽を出し、続いて夏の草が登場してきます。これから梅雨を越えていく前には秋の花であるコスモスの芽が出てきます。確実に季節は動いて一年を刻んでいくのです。その一年が積み重なって十年という節目を刻んでいきます。人生はそうして過ぎていくと考えると、一日ごとの積み重ねがいかに大切なのか頭では理解できるのですが、一日を価値高く生きているかというと案外気楽に過ぎていくことが多いものです。

人生には上り坂と下り坂、そして、まさかという坂があると教えられてきましたが、先日ご縁をいただいた運送会社の女性社長から「まさかはない必ず原因がある」と聞かされて、いつの間にか誤魔化してきた自分を見つけた思いがしました。

「勝ちに不思議の勝ちあり。負けに不思議の負けなし。」

勝負の場でなぜか勝てたという不思議な勝ちがあつても、負けにはどこかで手を抜いたり、ダメだと感じた自分がいたりして、原因があるから負けたのであつて何もないのに負けることはないのです。どこかで手を抜いていたのでは、と考えさせられることが新年度の始まる前から続いて発生してきました。

辛く厳しいことが起きる前には必ず前兆がある。それを読み抜ける力を備えているかどうか

勝ち負けを決めていくことにつながっていくのです。「こんな簡単なことがなぜ？」と思えるようなことも、実は責任者である私自身が甘く構えていたからであり、厳しく指導したからすぐに改善できるわけでもありません。

長い時間をかけて作ってきた信用は、崩れていくときは瞬間で終わりです。そして、その事実をしつかり受け止めながらこれから先の歩みをしつかり刻んでいかねばなりません。崩れ去って終わりではないという思いがなければ、これまで積み上げてきたものは何であつたかと思うのです。

そのことを、現代の西郷どんと仲間から親しまれている鎌田建設の鎌田社長から送られてきた「菊と龍」玉砕した一兵士の遺書が教えてくれました。

もし玉砕して、そのことよって祖国のひとたちが、すこしでも生を樂しむことができれば、祖国の国威が、すこしでも強く輝くことができればと、せつに祈るのみである  
遠い祖国の若き男よ 強く逞しく、朗らかであれ  
なつかしい遠い祖国の若き乙女たちよ  
清く、美しく、健康であれ

まず、自分の仕事を誇りあるものに。  
子供たちに誇れる国を残したい。

被災地にこころを寄せながら

木南 一志 拝

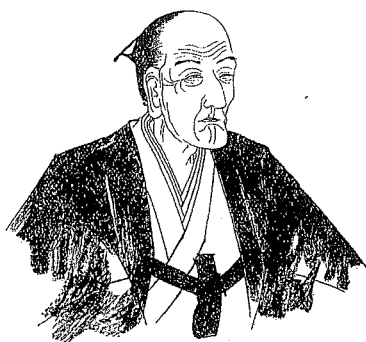
NPO法人 愛ランド様の協力で障害を持つ皆さんが宛名貼り、封入作業をしてお届けさせていただいております。

## 尋常小學修身書 卷五 兒童用

### 第八課 儉約

上杉鷹山は十歳の時に、秋月家から上杉家へ養子に来て、十七歳で米澤藩主となり、よい政治をして評判の高かつた人であります。

鷹山が藩主となつた頃は、上杉家には借財が大そう多く、其の上、領内には不作がつつて、人民も難儀をしてゐました。鷹山は此のまゝにしておいてはならないと思ひ、儉約をもととして家を立直し、人民の難儀を救はうと決心して、まづ江戸にゐる藩士に其の志を告げました。しかし、藩士の中には鷹山に従はないで、「殿様は小藩にお育ちになつたから、大藩のふりあひを御存じない。」などと言ふ者がありました。鷹山は少しも志を動かさず、領内に儉約の命令を出し、まづ自分のくらしむきをずつとつづめて、大名でありながら食事は一汁一菜、着物は木綿ものばかりときめて、實行の手本を示しました。



鷹山の側役の者の父が、或日、在方に行つて、知合の人の家に泊つたことがありました。其の人がふるにはいらうとして着物をぬいだ時、粗末な木綿の襦袢だけは、ていねいに屏風にかけて置きました。主人はふしぎに思つてたづねますと、「此の襦袢は殿様がお召しになつてゐたもので、それを悴がいたゞいて歸つたのを、私がもらつたのです。」と答へました。主人はそれを聞いて、大そう鷹山の儉約に感心し、其の襦袢を家内の人たちにも見せて、いましめました。